

第一部 博物館の役割・機能と博物館法

開かれた博物館へ —各地の博物館での取り組みの現状と、今後に向けて—

大阪市立自然史博物館外来研究員 島 絵里子

はじめに

「博物館はすべての人々に開かれている」とうたわれている。アメリカ博物館協会（AAM）は『卓越と公平—教育と博物館の公共性』（原題 “Excellence and Equity: Education and the Public Dimension of Museums”, AAM, 1992）において、米国の博物館界は、すべての人々に対してより豊かな学習の機会を与え、賢明で豊かな人間性を備えた市民を育成するという責任をもつと発信した（注1）。国際博物館会議（ICOM）の『職業倫理規定』（原題 “Code of Ethics for Museums”, ICOM 2004, redesigned in 2017）においても、「博物館は公衆に開かれている」と明記されている（注2）。日本国内においては、教育基本法（1947年制定、2006年改正）において、「国民一人一人が、自己の人格を磨き、豊かな人生を送ることができるよう、その生涯にわたって、あらゆる機会に、あらゆる場所において学習することができ、その成果を適切に生かすことのできる社会の実現が図られなければならない」（第三条）こと、「個人の要望や社会の要請にこたえ、社会において行われる教育は、国及び地方公共団体によって奨励されなければならない。2 国及び地方公共団体は、図書館、博物館、公民館その他の社会教育施設の設置、学校の施設の利用、学習の機会及び情報の提供その他の適当な方法によって社会教育の振興に努めな

ければならない」（第十二条）ことが定められている。そして、社会教育法（1949年制定）によって、「図書館及び博物館は、社会教育のための機関とする」と定められている（社会教育法第九条）。博物館法（1951年制定）においては、「この法律において「博物館」とは、歴史、芸術、民俗、産業、自然科学等に関する資料を収集し、保管（育成を含む。以下同じ。）し、展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行い、あわせてこれらの資料に関する調査研究をすることを目的とする機関（中略）が設置するもので次章（注3）の規定による登録を受けたものをいう。」（第二条）と定義されている。日本博物館協会では2004年から「誰にもやさしい博物館づくりの事業」にかかわる調査研究を行い、「外国人対応」「バリアフリーのために」「高齢者プログラム」「欧米における博物館のアクセシビリティ」に関する内容について、11冊の報告書を2006年度までに発行した。こうした動向も牽引となり、多くの博物館ですべての人を迎え入れようとする具体的な実践が進められてきた（駒見、2014）。日本国内においても、博物館は、人々一人ひとりに開かれたものであるということや、そうであろうとする積み重ねが読み取れる（注4）。

それでは、すべての人々に開かれた博物館とは、どのような博物館だろうか。多様な人々に開かれ

た博物館になるためには、何が必要なのだろうか。各地の博物館で様々な取り組みが行われてきているが、その情報共有の場はまだ少ない。また、その情報を必要としている方々へどのように情報を届けていくか、そして、人々のニーズをどのように丁寧に聞き取り反映させていくかという点も、発展途上といえるだろう。自分自身が科学博物館で取り組んできた経験や、一利用者として各館を訪れたり情報収集したりしてきたことを記しながら、考えていきたい。

自分が利用者として博物館を訪ねるとき、博物館内に乳幼児連れの休憩スペースがある、授乳室がある、筆談可能と明記されている、点字ガイドが貸し出しされているなどの環境に出会うと、たとえ言葉で表されていないくとも、自分たちは歓迎されているんだ、ここに来てもいいんだという安心感が生まれる。博物館側は「開かれた博物館へ」の一步を、様々なところから踏み出せるのだと思う。「博物館とインクルージョン」をテーマに活動されている安曾氏は、インクルーシブ教育の専門家であるスーザン・ピアソン氏の言葉を引いて、みんなで一緒に作っていく旅そのものがインクルーシブミュージアムだと提案している（博物館の手話ガイド育成支援プロジェクト，2019）。なにか正解や完成型があるのではないことを心に留めながら、様々な館の「開かれた博物館へ」の取り組みをみていきたい。

国立科学博物館での取り組み

さわれる展示を紹介する点字冊子の作成

国立科学博物館には、「若手職員による萌芽的事業」という制度があり、職員がやりたい事業を提案、申請し、採択されると予算が配分され、取り組むことができた（※2017年当時）。筆者は在

職時に、「多様な来館者の「潜在的なニーズ」に応える学習教材及び学習プログラムの開発」というタイトルで申請し採択され、館内のさわれる展示を紹介する点字冊子の作成と、さわれる教材を活用した新規学習プログラムの開発（「盲学校、盲ろう者支援センター、聾学校との連携」の項で後述）に取り組んだ。

当初は「さわれる展示を紹介する『さわれる絵本』をつくる」ことを目指してスタートしたが、他館にはどのような事例があるのか、実際にはどのように作成をすすめていけばいいのか、見当がつかなかった。Web上で「博物館 点字冊子」などと入力して検索しても、あまり情報があがってこなかった。そこで、2017年度日本ミュージアム・マネジメント学会大会にて知り合った方に、国立民族学博物館 准教授 広瀬浩二郎氏が中心となってすすめられている「ユニバーサル・ミュージアム研究会」（注5）及び「4しょく会」（注6）を紹介していただき、まずは両会に参加することとした。そこで、「視覚障害（注7）をもつ方々に使っていただく冊子をつくるのであれば、当事者である方々に、作成を開始する前の段階から作成に関わってもらった方がいい」とご助言をいただき、実際、この研究会以降、やりとりを続けることができた。盲学校出身の成人女性及び広瀬氏にご協力いただき、冊子の内容や中身を固める前に、それぞれ別の日に博物館へご来館いただき、一緒に館内のさわれる展示を中心に歩き、感想をもらった。

2つのアンモナイトが並ぶ展示をさわりながら、「この2つはどうしてさわったときの温度が違うのか」とか、クワガタの地域変異を示す模型のところでは、「このざらざらやつるつるなどの触感の違いは、実際の違いを反映しているのか、それとも製作上の問題なのか」など、次々と質問の声があがった。私はといえば、事前に展示を何

度かさわっていたものの、そのような疑問は思い浮かんだこともなく、これらの発言にたくさんの刺激をもらいながら、「研究員に確認する」という返答が続いてしまった。それでも、全盲のお二人と館内を歩いた時間はとても楽しく刺激的で、また一緒に歩きたい、もっと一緒に色々さわって話したいと感じ、一緒にさわって感想を話し合い、館内を歩く時間を、とても満喫した。自分がこれまでいかに展示を「見たつもり」「さわったつもり」になっていたのかも痛感させられた時間だった。

作成期間の制約から、当初の「さわれる展示を紹介する『さわれる絵本』」を作成することはできなかったが、『国立科学博物館 上野本館 見学ガイド』と、『国立科学博物館 常設展示項目リスト』の2種類の点字冊子を作成することができた。これらは完成後、全国の盲学校及び視覚特別支援学校に送付されたほか、館内の総合案内にて常時貸出可能となっている。

なお、ユニバーサル・ミュージアム研究会への参加を通して、筆者は、多くの有益なアドバイス、情報に出会えただけでなく、その後も参加者とお互いに情報交換を続けている。研究会メンバーは、お互いに良い刺激を与え合える関係なのだと感じている。

盲学校、盲ろう者支援センター、聾学校との連携

東京都立八王子盲学校及び東京都盲ろう者支援センターと連携を行い、「さわれる教材」（旧学習用貸出標本）及び館内のさわれる展示を活用した新規学習プログラム『ミュージアム・タイムトラベラー 太古の地球さがしー』の開発・実施を行った（島ほか、2018；島・岩崎、2020）。

また、聾学校との連携では、東京都立葛飾ろう学校及び多摩美術大学と連携し、かはくスクールプログラムの改善、試行を行った（2016～2017年）。2016年度には『骨ほねウォッチング』、

2017年度には『鳥のくちばしのひみつ』の改善・試行を行った。聾学校の生徒と一口にいても、障害の状況は様々であり、口話、手話、文字、音声など、好まれる情報手段も様々である。そこで、試行の際には、話者は口話が伝わりやすいよう意識し、手話と文字の表示（紙芝居の使用や、モニター主画面の横下に小さなモニター画面でUDトーク（注8）による文字画面を表示）をあわせて行った。

かはくスクールプログラムの実施対象に

「特別支援学校」を明記

学校教員に配布している国立科学博物館の冊子『先生のための国立科学博物館活用ガイド』の「かはくスクールプログラム」紹介ページにおいて、2016年度から対象に「特別支援学校」を明記した。また、特別支援学校及び特別支援学級からスクールプログラムの申込みがあった際には、できるだけ先生方に下見対応をお願いし、先生方とお話を事前にしっかりと、プログラムを実施している。

筑波実験植物園での取り組みー「手話で楽しむ植物園」、「手話通訳付き案内」、「五感で楽しめるユニバーサル植物園を目指して」ー

筑波実験植物園では、植物を五感で体験しながら誰にでも楽しんでもらえる植物園を目指したプロジェクトに取り組んできた（2010～2013年）。特別支援学校との連携、五感で楽しめる企画展、手話や触察で楽しむガイドツアーなどである（詳細は大村ほか（2013）を参照）。その後も、特別支援学校との連携、「手話で楽しむ植物園」、「手話通訳付き案内」等を継続している。堤ほか（2015）によると、「手話通訳付き案内」は、植物園の企画展会期中の一部の展示案内や講座において、手話通訳者がつく形で実施している。「手話で楽しむ植物園」は、植物園を案内する1つのイベント

として企画し、植物の解説を行うだけでなく、聾学校理科教員がついて、植物の手話についても解説する形式で行っている。特に「手話で楽しむ植物園」は、両者（※聾者と健聴者）が同時に学べる上、普段とは違う気づきや発見がある、お互いにコミュニケーションがとれる、一緒に楽しめるイベントとなっている。障害者支援は健常者が障害者を支援するという一方の支援になりがちであるが、本イベントは「一方の支援を双方の学びに変えていく（広瀬，2014）」実践の場になると考えているという。

現在の取り組みー「インクルーシブな鑑賞環境」タスクフォースの設置ー

国立科学博物館イノベーションプランの中でも喫緊の課題として認識されるインバウンド対応を意識した展示の充実、及び、来館者目線に立った安全で利用しやすい環境づくりの実現に向けて、具体的な詳細検討を行い、アクションプランを立案して実施への道筋をつけることを目的として、「インクルーシブな鑑賞環境」タスクフォースが2019年に設置された。誰でもが楽しめる博物館を目指して、多言語話者や聴覚に障害を持つ方々など、多様な利用者を想定したインクルーシブな鑑賞環境を実現するために、必要な調査・検討・試行を実施、導入のための提案をまとめている。

多摩六都科学館での取り組みー

「0歳からのプラネタリウム」「おもいやりプラネタリウム」「科学館の絵本をつくろう」「やさしい日本語でプラネタリウムをたのしもう」、ラポー

多摩六都科学館には、「サイエンスエッグ」と呼ばれる、直径27.5m、世界最大級の大きさで、1億4000万個を超える星々を映し出すプラネタリウムドームがある。ここでは、2019年5月22

日に、0歳から3歳くらいの乳幼児とその保護者を対象とする「0歳からのプラネタリウム」が初めて開催された。それ以降、年に数回、開催が続いている。初回、平日の朝一番の投影だったにも関わらず、定員234人が満席となり、そのうち0～3歳の乳幼児は102人だった。平日のプラネタリウムが満席になったのは、科学館が開館して以来25年間で初めてのことだったという（多摩六都科学館ブログより、https://www.tamarokuto.or.jp/blog/rokuto-report/2019/05/29/baby_planetarium/ 2020.3.1参照）。「0歳からのプラネタリウム」情報は、小さい子どもを持つ保護者向けのWebサイトであるmamakoeやiko-yo、gyutteなどでも紹介されており、その関心の高さがうかがえる（たとえば、ぎゅってWebママブログ（2019.10.23Update）、<https://gyutte.jp/blog/208640> 2020.2.29参照）。2020年1月22日開催回は「ほしぞらのどうぶつえん」。子どもと見に行くのが楽しみになるタイトルだ。チラシには、「赤ちゃん大歓迎！0歳から3歳くらいのお子様と楽しむプラネタリウムです。おしゃべりしても泣いても大丈夫！」と明記されており、乳幼児連れで安心して参加できるのだな、という気持ちになる。

また、「障がいのある方とその家族や、乳幼児をお連れの方も安心してご覧いただける投影回」という『おもいやりプラネタリウム・大型映像』が、毎月第3木曜日に開催されている。チラシの裏面には、以下の記載がある。「おもいやりプラネタリウム・大型映像は障がいのある方とその家族や、乳幼児をお連れの方など、通常のプログラムの利用に不安を感じている方も気兼ねなく、安心してご観覧いただけるプログラムです。お互いにおもいやりを持って、どなたでもお楽しみいただけますよう、みなさまのご理解・ご協力をお願い致します」。そして、いくつかのQ&Aが並んでいる。たとえば、「Q. 車いすや歩行器で来たら？

→スタッフが専用の入口からご案内します。受付時にお申し出ください、「Q. 音や光の出る医療機器を使用しているのですが・・・→安心してご観覧いただけます。ドームの性質上、できるだけ音や光が出ないよう工夫・ご配慮をお願い致します」、「Q. 子どもが大声で泣いてしまったり、席でじっとしていられなくなったら・・・→出口付近のお席までご案内します。外に出てひとやすみし、落ち着いてから再度ご入場いただくこともできます」など。小さな子ども等がプラネタリウムで大声で泣き出したり騒いだりしてしまったり大変と、行くことをためらう同伴者の気持ちに寄り添い、外に出て一休みして再入場できることを伝えることで、「それなら行こうかな、楽しめそうだな」という気持ちにさせてくれる。

「やさしい日本語」を用いたワークショップやプラネタリウムも2018年度より始まった。地域に住む、日本語を母語としない子どもたちに、科学の楽しさを知ってほしいというのがねらいである。2020年1月12日には、外国にルーツをもつ小学生とその家族を対象に、ワークショップ「科学館の絵本をつくらう」が行われた。参加者は科学館の中を歩き、iPadで科学館の「デジタル絵本」と「紙の絵本」を作成した。絵本は、やさしい日本語でも外国語でも作ることができるように工夫されたものであった。チラシには「多摩六都科学館は誰でも楽しむことができます。」と大きく書かれており、日本語の漢字にはすべてふりがながついている。また、大きな文字部分は、英語、中国語、韓国語が併記されている。同年1月18日の「やさしい日本語でプラネタリウムをたのしもう」では、解説者がやさしい日本語で当日の星空を解説するプラネタリウムが開催された。

多摩六都科学館は、参加体験型の展示が多いことに加え、展示室「しくみの部屋」、「自然の部屋」、「地球の部屋」では、ラボが設置されており、「ア

ンモナイトの化石をみてみよう」、「顕微鏡で見てみよう！～春の花～」などの体験プログラムが毎日行われている。たとえば「アンモナイトの化石をみてみよう」では、アンモナイトの様々な形状や断面を見るだけでなく、大小様々な実物標本をさわることができる。

江戸東京博物館

ユニバーサルサービスガイド

江戸東京博物館では、「ユニバーサルサービスガイド (https://www.edo-tokyo-museum.or.jp/assets/img/2018/06/universal_guide.pdf 2020.3.1 参照)」が配布されており、「お身体が不自由な方や小さなお子様と一緒にの方などが安心かつ快適に館内でお過ごしいただけるようバリアフリーのご案内をして」いる。たとえば「サポートサービス」欄には、「聴覚障害等のあるお客様へ」として、「筆談器」の貸出場所が記載されている。また、「視覚障害のあるお客様へ」では、「手でみる展示」コーナーの場所や、展示ガイドブックの貸出場所、常設展示室触知案内図やミュージアム・ラボ体験住宅触知見取図の場所が記載されている。「その他の便利なサービス」欄では、常設展ボランティアガイドが、日本語、英語、中国語、韓国語、フランス語、スペイン語、ドイツ語、イタリア語で行われていることや、予約も可能なことが分かる。また、常設展音声ガイド貸出として、日本語、英語、中国語（簡体字）、中国語（繁体字）、韓国語、フランス語、スペイン語、ドイツ語、イタリア語、ロシア語、タイ語、ポルトガル語、マレー語が利用できることや、音声だけでなく、ガイド端末の画面に解説文が表示されることが紹介されている。そのほか、多目的トイレが各フロアに設置されていること、オストメイト対応トイレの場所、エレベーターの場所などが書かれている。

体験型模型と、体験型模型の触察模型設置

館内には、大名駕籠や纏などの体験型模型が複数あるほか、このうち人力車や自転車などの体験型模型には、手のひらサイズの触察模型が設置されている。手のひらサイズの模型があることで、その全体像を触って確認することができる。

ワークショップ「さわって楽しむ江戸博」

2018年11月18日に、ワークショップ「さわって楽しむ江戸博」が開催された。チラシには、「江戸東京博物館の常設展示を、見るだけでなく、さわって楽しむワークショップを企画しました。持ち上げて振ることができる体験模型「す組」の纏はいつも大人気ですが、実際に使われている纏はもっとデコボコ、シャリシャリしています。さわる「す組」の模型で、ぜひ体感してください。「手で見る展示」コーナーでは、中村座や日本橋などの建築模型や人力車、自転車などの乗物を縮小した「さわる模型」、そしてユニークな「さわる浮世絵」を展示しています。このコーナーの楽しみ方をご案内します。さらに、この日限定のさわる資料もご用意しますので、お楽しみに！」と書かれている。また、チラシ表面には、纏やダルマ自転車等の「さわる模型」の写真がのっているのだが、その写真の輪郭等に透明の線が盛り上がり描かれ（PP加工）、透明の点字で説明が併記されており、裏面には点字で説明が書かれている。さらに、館内案内の点字ガイドがあり、ご希望の方には点字データを渡すことができることや、その問い合わせ先が明記されている。

英語でのプログラム

2019年1月から3月にかけて開催された企画展「春を寿ぐ—徳川将軍家のみやび—」では、計4回のミュージアム・トークのうち1回が、「英語通訳付きミュージアム・トーク」として実施さ

れた。また、2020年1月18日は、「えどはく寄席スペシャル」のうちの一回として、「志の春の英語で RAKUGO！」が実施された。季節ごとの週末に常設展示室内で開催している「えどはく寄席」のうち、「江戸芸かっぼれ」と「新内」は年5回ずつ英語通訳付きで行っている。また、前述のように、ボランティアによるガイドと音声ガイドの両方で、多言語での対応が行われている。

茅ヶ崎市美術館

—企画展『美術館まで（から）つづく道』—

2019年7月から9月にかけて企画展『美術館まで（から）つづく道』が開催された。きっかけは、「MULPA」（注9）というプロジェクトにおいて、ある弱視の方が、この複雑な美術館までの道のりを“むしろ迷路のように楽しんだ”といったことだったという。障害者やマイノリティと位置づけられることの多い人たちと取り組むインクルーシブデザインの手法を用いたフィールドワークを、2018年から2019年にかけて断続的に行い、フィールドワークに参加した表現者が、実際に茅ヶ崎を歩いた体験をもとに創作し、視覚、聴覚、触覚、嗅覚などあらゆる感覚を用いて鑑賞する新

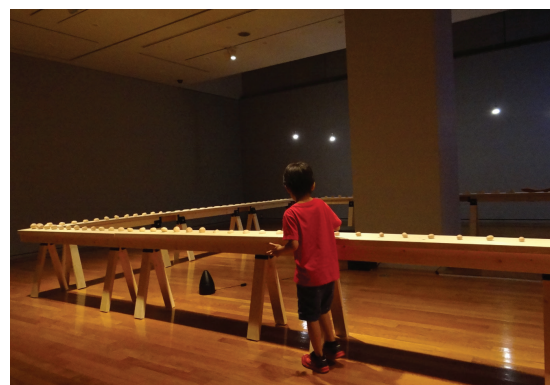


図1. 茅ヶ崎市美術館企画展『美術館まで（から）つづく道』の展示《うつしおみ》。

たな作品を展開したのが本展だという（茅ヶ崎市美術館 Web サイトより、<http://www.chigasaki-museum.jp/exhi/2019-0714-0901/> 2020.3.1 参照）。

作品は、指を使って作品に触れながら歩くと、音や光や香りが次々と現れる《うつつおみ》や、短冊型の作品を鳴らすと様々な音が響く《音鈴》、来館者が自分の散歩の記憶を残していく参加型のプロジェクトも含まれた、三部構成のインスタレーション《茅ヶ崎散歩記憶と記憶細胞》、茅ヶ崎の道で捉えた6つの香りがケースに入った探検用貸出キット《道の香りパレット》、小さな子と鳥をテーマに時間の流れを一つのキャンパスに描いた絵画《土手の上で》であった。

息を吹きかけたり、館の方に手渡されたうちわであおいだりして短冊を揺らすと音が鳴ったり、手のひらサイズの木片を触ると様々な音や光や香りが出たり。貸出キットの様々な香りを嗅いで、さらにはまわりの木々の葉や空気を嗅いで美術館周辺を歩くのも、普段とは違う探検気分、楽しいものだった。筆者は小学校低学年の子どもと一緒に行ったが、これまで美術館と一緒に行くときは、「さわらない・さわがない・走らない」と伝えて入館し、さらには静かに最後まで見られるかどきどきしながら過ごし、途中で子どもが早く帰りがたがって鑑賞を断念して帰る・・・ということが何度かあったものの、この企画展では、子どももとても楽しんで、親子で長時間滞在して、道の香りパレットを持って館外散歩までして、たっぷり満喫することができた。館で出会うどのスタッフの方も、来館者と展示とのやりとりを、温かく笑顔で見守ってくださっていて、それがまた館での滞在を安心して過ごす時間にしてきていたことが、とても印象的だった。

本企画展の開催前には、受付・監視スタッフと事務所スタッフに対して、当事者を講師に招いたダイバーシティ研修が行われた。本企画展を担当

した藤川悠学芸員によると、当初は障害がある方が来館された際に、どのようにお迎えすればいいのか少なからず不安を抱えていたスタッフも、研修のおかげでずいぶんと気負うことなく来館者の皆さんをお迎えできたように感じられたという。博物館スタッフを対象とした、当事者を講師に招いたダイバーシティ研修の実施は、今後も「開かれた博物館へ」の取り組みにおいて各館の参考になるだろう。

関連催事としても、シンポジウム「フィールドワークからの作品制作」には手話通訳がつき、また、美術と手話「手話で楽しむ鑑賞ツアー」では、「聞こえる人、聞こえない人、聞こえにくい人、みんなで楽しむ作品鑑賞ツアー」が行われた。

また、本企画展のドキュメント（記録集）が、茅ヶ崎市美術館のホームページに公開されている（http://www.chigasaki-museum.jp/files/6315/8140/4966/2019_summer_report.pdf 2020.4.17 参照）。「アーティストや研究者が、聴覚障害者、小さな子、視覚障害者&盲導犬、車椅子ユーザーと一緒に美術館の周りの道を歩いた体験をもとに、視覚、聴覚、触覚、嗅覚から感じる作品を作り上げた展覧会の記録集」である。作品解説に加えて、作品制作協力者のコメントや来館者の感想、そして、本企画展での美術館の取り組み―「1. 点字チラシの作成 2. QR コードの配置 3. リーフレットの作成 4. コミュニケーションボードや筆談ボードの設置 5. 美術館を楽しむためのご案内を配布 6. 低い高さで作品を展示」―が紹介されている。

京都国立近代美術館

―「感覚をひらく―新たな美術鑑賞プログラム 創造推進事業」―

京都国立近代美術館では、平成29年度より地域の盲学校や大学、行政と連携して、「感覚をひ

らくー新たな美術鑑賞プログラム創造推進事業」を行っている。これは、「見る」ことを中心としてきた美術館での体験を問い直し、障害の有無を超えて誰もが美術館を訪れ、経験できるようなプログラムを創造、推進する取り組み」だという（京都国立近代美術館「感覚をひらくー新たな美術鑑賞プログラム創造推進事業」Web サイトより、<https://www.momak.go.jp/senses/> 2020.3.1 参照）。

このプロジェクトの一環として、点字・拡大文字による京都国立近代美術館のパンフレット、及び所蔵品を触って親しむ触図「さわるコレクション」が制作された。パンフレットについては、「視覚障害のある方が美術館について知り、来館したいと思っただけできるよう、内容や文章について検討を重ね」たという。実際、点字・拡大文字のパンフレットを手にとってみると、読み手に語りかけるような、書き手の優しい気持ちが伝わってくる、手紙のような案内文となっている。京都国立近代美術館というところが、いったいどのような場なのか、なにができて、建物のまわりにはなにがあるのか、そして、「みなさまのお越しを、心からお待ちしています」というメッセージが書かれている。A4 サイズの拡大文字パンフレットで24 ページという分量のなかで、美術館のコレクション1 つ1 つについては詳細に紹介されていない。一方で、たとえば「鑑賞を深める対話」という章では、「一緒に来た方と、作品について思ったことや感じたことを話し合うと、自分とは違う価値観や感じ方にふれることができます」というメッセージがあり、「★対話のヒント」というページへと続く。そこでは、「どんな素材が使われていますか。どんな手触りがしそうですか」、「作品から、なにか音が聞こえてきそうですか。匂いがしそうですか」、「絵の中に入ったら、どんな感じがしそうですか」などが語りかけられている。

「所蔵品を触って親しむ触図「さわるコレクショ

ン」(2017 年度)には、浅井忠《編みもの》、福田平八郎《竹》、河井寛次郎《打楽扁壺》の3 作品がある。作品ごとに印刷方法が異なるのが面白い。《編み物》はバーコ印刷(熱によって膨らむ樹脂パウダーを印刷面にふり掛けて、印刷する方法)、《竹》はエンボス加工(金属の型を使って、紙の表面を押し出す、または凹ませる)、《打楽扁壺》は点図の印刷方法が採用されている。いずれも、「作品にあった印刷の方法を探しながら、作成し」たといい、「作品毎に異なるさわり心地を楽しみながら、当館の作品をお楽しみくださいませ」というメッセージが添えられている。

2018 年8 月10 日・11 日には、本プロジェクトの一環として、京都国立近代美術館オープンデー「美術のみかた、みせかた、さわりかた」が開催された。このチラシは、同じデザイン・配色で、点字入りのものと点字なしのものの2 種類が作成・配布された。どちらも、目や手、指の形、文字が点々で表現されているのが印象的である。点字入りのチラシの方は、点々の部分の輪郭が点図となっていて、さわって形をみることができる。当日は、「当館所蔵の立体作品を展示し、手で触れて鑑賞したり、言葉を介して気づきを共有したりと、障害の有無をこえて、さまざまな方法で作品鑑賞に取り組」んだという(京都国立近代美術館の案内文より)。

公益財団法人東京都歴史文化財団発行
『特別支援学校・学級のためのミュージアム・ホール
プログラム活用ガイド2019
～みんなで出かけよう 発見の旅へ～』

東京都歴史文化財団が運営する、東京都庭園美術館、東京都江戸東京博物館、江戸東京たてもの園、東京都写真美術館、東京都現代美術館、東京文化会館、東京芸術劇場、アーツカウンシル

東京の各プログラムや展示，アクセスや問い合わせ先に加え，バリアフリー情報が記載されている冊子 (<https://www.rekibun.or.jp/wp-content/uploads/2019/04/22c5eab53c97e019f5045db813641558.pdf> 2020.3.1 参照)。冊子の最初の見開きには、「これまで文化施設に来たことのない方にも，プログラムに参加して歴史や文化の魅力に触れていただきたい，サポートを活用して，発見の旅をより快適に楽しんでいただきたい，そんな思いでスタッフ一同，皆様をお待ちしております。」と書かれており，歓迎の気持ちが伝わってくる。「まずは，お気軽にお問合せください。」の一言もうれしい。

南山大学人類学博物館

ー常設展示ほぼすべてが「さわる展示」ー

南山大学人類学博物館は2013年にリニューアルオープンし，常設展示がほぼ全面的に「さわる展示」となった。このような展示を作った背景は，視覚障害者の方たちを含めて，すべての人が利用できる博物館を作りたい，というのが大きな目標であり，「すべての人の好奇心のための博物館を作る」がスローガンになったという（黒澤，2016）。黒澤氏の『さわる展示の未来ー南山大学人類学博物館の挑戦』（2016）の中に，「ユニバーサル・ミュージアムを目指す博物館」としての取り組みが紹介されており，そこからいくつかを紹介したい。さわる展示を実現するにあたっては，名古屋ライトハウスに協力をお願いしたという。展示室の中央は木の床で，一方，展示スペースの方はカーペットになっている。名古屋ライトハウスにアドバイスをもらい，足の感触でコーナーが変わったことがわかるようにしたという。また，展示資料の一点一点には，点字のタグがついている。名古屋ライトハウスから，一人で来館しても，タグによって展示物が何であるかがわかるよ

うにしてほしいとのアドバイスを受け，このようなタグを作ったという。「わからないことは当事者に聞け」をモットーにして，何かあるとすぐにライトハウスみなさんに確認していました」という姿勢に，共感するとともに，実際に成し遂げたということに敬服する。館のWebサイトにも，資料のさわり方が丁寧に紹介されている (<http://rci.nanzan-u.ac.jp/museum/shoukai/sawaru.html> 2020.3.1 参照)。

展示の解説は多言語表記を採用しており，冊子にして表示している。2015年時点で，日本語，英語，中国語，スペイン語，アラビア語，フランス語，ポルトガル語の解説があった。

博物館の手話ガイド育成支援プロジェクト

(プロジェクト代表 筑波技術大学 生田目美紀氏)

筑波技術大学生田目研究室では，「ミュージアムのユニバーサル・アクセス」をテーマに，聴覚や視覚に障害のある方が，博物館や美術館で「より楽しく学ぶ」ことを目指す「情報アクセシビリティ」を研究している。研究を通じて見えてきたことは，科学系博物館（水族館・動物園・植物園を含む）で活躍する人材育成が喫緊の課題であるということだったという。そこで，クラウドファンディングに挑戦し，プロジェクトは目標金額を超えて成立した。2019年7月にキックオフ講演会が開かれ，その後9月から11月にかけて，大洗水族館，千葉市科学館，国立科学博物館の3館で研修が行われ，4名の当事者手話ガイドが誕生した。「手話ガイド育成支援プロジェクト」では，現在も引き続き，手話を活かして活動したいと考えている，ろう者・聴者と，手話ガイドを必要している館・園をつないでいる。詳細は当プロジェクト報告書「聴覚障がい者が解説！博物館の手話ガイド育成支援プロジェクト報告書」を参照してほしい。

和洋女子大学文化資料館

日本において博物館と障害のある人との関係の議論が高まりをみせたのは1970年代末で、1981年の国際障害者年を契機に、先駆的な博物館で内容や方法の検討と実践が行われたが、実際の検討対象となったのは、肢体不自由と視覚障害の人たちであったことを駒見（2014）は指摘している。そして、近年では知的障害と自閉症・情緒障害を含む発達障害の児童生徒の増加率は大きく、1989年と2014年を比較すると、知的障害特別支援学校数は1989年の475学校から約1.5倍、児童生徒数は5万4976人から約2.2倍、小・中学校の特別支援学級数は約2.4倍、児童生徒数は約2.3倍の増加となっており、今日求められる博学連携に関しては、知的障害特別支援学校学級と発達障害のある児童生徒も対象として明確に位置づけることが重要と述べている（駒見、2016）。

駒見氏が中心となり、和洋女子大学文化資料館では、知的障害特別支援学校と連携した博物館教育の意義とあり方を検討する目的で、2012年と2013年に、東京都立葛飾特別支援学校において博物館出前講座が実践された（駒見、2015）。また、ここでの成果をもとに、知的障害だけではなく肢体不自由の重複障害のある生徒に向けた博物館出前講座に、東京都立鹿本学園の理解と協力のもとで取り組まれた（駒見、2016）。その実践からは、「とりわけ脳性まひの肢体不自由と知的障害を併せ有する児童生徒の場合、実際の博物館利用はきわめて難しい」ものであり、「博物館側がその特性を活かした経験を障害のある彼らに提供することにおいて、出前講座は博物館利用以上に有益とも考えられる」と考察している（同、駒見、2016）。

東京国立近代美術館－「Let's Talk Art！」－

英語による鑑賞・異文化交流「Let's Talk Art！」が、2019年3月22日より、東京国立近代美術館にて開始された。「作品解説を聞くだけの一般的なガイドツアーとは異なり、参加者の皆さんがファシリテーターと会話をしながら作品の理解を深めていく体験型のプログラム」であり、「約1時間で3つの作品を鑑賞し、描かれているモノやコトに基づき、日本と参加者の文化を話し合ったり、時には描かれている土地や建物の歴史・観光情報をお知らせしたり」するという（東京国立近代美術館2019.3.14プレスリリースより、https://www.momat.go.jp/ge/wp-content/uploads/sites/2/2015/01/LTA_pressrelease_momat-JP_190402.pdf 2020.3.1参照）。本プログラムを開始するため、2017年度から3年間、プログラム設計・監修、および2018年3月に公募により選ばれた有償ファシリテーターの研修等を担当してきた大高氏によると、本プログラムでは、参加者が日本美術・文化および参加者間異文化交流を楽しむことをねらいとしている。これまでの参加者は日本在住外国人が多く、その知人の海外在住者、観光客や、英語力を維持したい美術愛好家の日本人を含む。終了



図2. 東京国立近代美術館「Let's Talk Art！」。（大高幸氏撮影）

時のアンケートでは、参加満足度は高く、「他者の異なる視点を知るのが面白かった」、「自分だけでは気づかないことを発見できて楽しかった」といった自由記述が記されているという（大高，2020）。毎週金曜日の18時半から約1時間の実施で、事前申込制で定員6名、詳細は館ホームページ（<http://www.momat.go.jp/english/am/> 2020.3.1参照）に掲載されている。

筆者自身が参加した回では5人の参加者がおり、まずは自己紹介から始まり、ファシリテーターから「正解・不正解はない」というメッセージを受け取って、リラックスした雰囲気の中で展示室へ出発した。屏風作品の前では、まず、立って作品を鑑賞したのち、参加者全員に椅子が用意され、再度、椅子に腰掛けて鑑賞した。「なにか、見えるもの、印象は、変わりましたか？」というファシリテーターからの問いかけに、参加者からは様々な声があがった。その後、その作品の近くに置かれた畳がファシリテーターから紹介され、「畳に座って、屏風を見る」視点が紹介された。印象的だったのは、次の、鳴く虫を愛でている女性たちが描かれた作品。日本からの参加者で、鳴く虫を愛でる習慣を知っている方々は、それほど大きな驚きはなくその作品を鑑賞しているが、海外からの参加者で、その習慣を聞いたことがないという方々は、「虫を愛でる！」「ええっ」という驚きの声ののち、その虫にあだ名をつける参加者もあらわれて、和気あいあいとした雰囲気であった。プログラム開始に向けてのトライアル中には、「作品の理解が深まるだけでなく、日本文化や歴史も分かる」、「国籍の異なる参加者の意見から新しい気づきや発見がある」という声が参加者から寄せられた（東京国立近代美術館 2019.3.14 プレスリリースより）というが、筆者自身が参加した回でも、それを感じることができた。

大高氏によると、動機の異なる初対面の人々が

会話する探究型鑑賞プログラムの要素として重要なのが「事前統合」であるという。「事前統合とは、たとえば、同じ小船に乗り込む人々が、安全で楽しい船旅となるよう、航路と船上での役割を船出前に各自考える機会を提供することである」という。「ファシリテーターは、これが会話による探究・意見交換を楽しむプログラムであり、美術作品に対して心に浮かぶ各人の考えはどれも重要で、美術に関しては「一つの正解」がある訳ではないことを話す。さらに、事前統合の要は、各人が短い自己紹介をし合うだけでなく、ファシリテーターがテーマにちなむ質問をすることだろう。テーマおよびこれから鑑賞する作品と各人の過去の経験をつなぎ、考える機会を提供するためである」と、事前統合の重要性について紹介している（大高，2020）。本プログラムに参加した筆者も、プログラムの始まりの、参加者同士、参加する人全員が自分の声を出して、お互いに顔と声を見て聞きあって、一緒に出発する、楽しいなかが始まるに違いないと予感する（筆者の場合は少しドキドキしながら）、あの時間の大切さをふりかえって感じた。

博物館法との関連

駒見氏は『博物館の理念的認識の推移について』（2017）の中で、現行の「博物館法に示された定義では、博物館の各機能が果たす人びとの学習と研究の目的を汲み取ることは難しい」ことや、現行の博物館法制定は、「博物館をひろく定着させて社会的価値を高めてきた要といえるが、博物館の核心となる教育の役割を定義として理解することが難しい」ことを指摘している。そして、「分化した専門性の高い機能を統合させ、諸機能の関係の構造化をとりまとめるのが博物館の目的である。だからこそ、博物館の発展には、幅ひろい教

育の目的を根幹に位置づけて、各機能を発揮する活動に取り組むことが大切だ」(同, 駒見, 2017)という重要な提言をしている。

倫理的なミュージアム－ Ethical museum －とは

グローバル化が世界を覆う中で、日本にも多様な文化的背景をもった人々が居住し、今後も増加が予想される中、人々が互いの多様な経験や意見に耳を傾け、安心して語らうことのできる場が求められる。

Besterman (2011) は、倫理的なミュージアム (ethical museum) は、多様な文化・価値社会から信頼されており、異なる信仰や背景をもつ人々が出会い、共通の基盤を見つけるための安全な場所 (safe place) になると指摘している。また、Falk & Dierking (1995) によれば、博物館は、人々が文化の違いを心地よく受け止めることを促すという。米国の博物館界が、ミュージアムはすべての人々に対してより豊かな学習の機会を与え、賢明で豊かな人間性を備えた市民を育成するという責任をもつ (AAM, 1992) と宣言してからもうすぐ30年がたつ。Besterman (2011) は、思慮に富んだ包摂的なミュージアムは、多様な文化が相互理解と信頼に基づき啓発しあう場であること、このような価値体系を表現しているミュージアムこそが社会の利益になると指摘している。

多様な人々のミュージアムへのアクセスを保障し、多様な人々が出会いともに学び合う場、共通の基盤を見つけるための安全な場 (safe place) としてのミュージアムの可能性に期待したい。

今後に向けて

今回取り上げた館以外にも、各地で、様々な館がそれぞれに「開かれた博物館へ」に取り組んでいる。一方で、学芸員や博物館職員の、館を超え

た情報共有の場は、まだ少ない。ユニバーサル・ミュージアム研究会や MULPA はあるが、会士士のネットワークづくりはまだこれからである。日本ミュージアム・マネジメント学会等にてバリアフリーやユニバーサル・ミュージアムをテーマとした研究会が開かれることもあるが、定期的な会にはなっていない。また、利用者側からみても、「開かれた博物館」に関する、館を超えて集約された情報というのは、現在はほとんどない。たとえば、「さわれる展示」を探そうと思っても、全国の博物館について「さわれる展示」の情報を集めて公開している Web サイトや本はまだない。このような情報を共有する場を、Web 上でつくること。そして、「開かれた博物館へ」の取り組みを手探りながらすすめたり、着手し始めた学芸員・職員らが直接集まって気軽に情報交換できる場をつくったりしていくことが必要だろう。もしも、自分の館でやりたいと思っても、どのようにすすめればいいのか迷ってなかなか動けずいたり、身近なところからは情報を集めたりできないような場合でも、たとえば上記のような Web サイトを立ち上げて役立つようにするなど、環境を整えていきたい。

最後に、自分自身の経験を再度ふりかえってみると、子どもが未就学児の頃に足を骨折した際、しばらくギプスをはめ車椅子での生活だった日々を思い出す。車椅子での移動がいつもより大変というのはあらかじめ予想できたことだったが、「ギプスをつけた姿を友達に見られたくないから外に出たくない、家から出たくない」という子どもの精神的な状況と、それにより筆者自身も外出できずに、親子で家にこもる日々となってしまった。博物館側がいくらバリアフリーを整えても、人がそこへ「行きたい」という気持ちにならない限り、行くことができない。当時は幸い、友人の誘いがきっかけになり、勇気を出して初めて車椅子

で外出した先で、笑顔で迎えられ、楽しく過ごせたことが自信となり、その後、車椅子で外出できるようになった。博物館側の職員としてできることは、ハード面だけでなく、ソフト面でも、「来てくれてありがとう」、「安心して過ごして行ってね」という気持ちを伝え続けていくことなのかもしれない。そして、やはり、博物館に直接行くことが難しい、もしくは、(前述の当時の子どものように)外出しづらい方々も、おそらく多くいらっしゃるだろう。そのとき、博物館は何ができるのか。筆者自身、「さわれる展示を紹介するさわれる絵本」づくりは未達成だけれども、この絵本のように、どんな場所にも、どんな環境下にいる方々にも、ミュージアムが姿・形を変えて、そこへ飛び込んでいけるような、そんな取り組みが、今後さらに求められるのだと思う。

追記

2020年3月現在、コロナウイルス感染拡大予防のための全国的な学校休校にともない、各地の博物館で「おうちミュージアム」等の取り組みが展開されている。たとえば、北海道博物館では「おうちミュージアム」というページを館のホームページ上に特別に作り、「長期休校の間、自宅で過ごす子どもたちが退屈せずに楽しみながら学べるアイデアはないかと考え、「おうちミュージアム」をオープンいたしました。家で楽しみながら学べるアイデアを発信している各地のミュージアムと手を組んで「おうちミュージアム」として、みなさまにお届けします」というメッセージと共に、「ならべて楽しもう アイヌ語ブロック」や「アンモナイト折り紙を折ろう！」などの教材を公開している(北海道博物館 Web サイトより、<http://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp/ouchi-museum/> 2020.3.1 参照)。子どもと家で過ごす日々が続く

状況の中、大変ありがたい取り組みであるが、一方で、学校休校・開校に関わらず、前述のように外出が難しい方々へ、いつでもどこでも博物館を安心して楽しんでもらえるように、このような各地の館の取り組みが、これからも続いていくことを願う。

謝辞

国立科学博物館 岩崎誠司氏、堤千絵氏、多摩六都科学館 伊藤勝恵氏、高尾戸美氏、成瀬裕子氏、江戸東京博物館 松井かおる氏、茅ヶ崎市美術館 藤川悠氏、京都国立近代美術館 松山沙樹氏、南山大学 黒澤浩氏、筑波技術大学 生田目美紀氏、明治大学 駒見和夫氏(前 和洋女子大学)、東京国立近代美術館「Let's Talk Art!」プログラム設計・監修ご担当 大高幸氏には、ご所属の各館等についての原稿をお読みいただき、貴重なご助言、ご指摘をいただいた。心より感謝申し上げます。

注釈

注 1 原文は、「The community of museums in the United States shares the responsibility with other educational institutions to enrich learning opportunities for all individuals and to nurture an enlightened, humane citizenry that appreciates the value of knowing about its past, is resourcefully and sensitively engaged in the present, and is determined to shape a future in which many experiences and many points of view are given voice.」(AAM 1992, pp.28) 以下からダウンロード可能である。
<http://ww2.aam-us.org/docs/default-source/resource-library/excellence-and-equity.pdf> (2020.3.1. 参照)

注2 原文は、「A museum is a non-profit, permanent institution in the service of society and its development, open to the public, which acquires, conserves, researches, communicates and exhibits the tangible and intangible heritage of humanity and its environment for the purposes of education, study and enjoyment.」(ICOM 2017, pp. 48)

以下からダウンロード可能である。

<https://icom.museum/wp-content/uploads/2018/07/ICOM-code-En-web.pdf>
(2020.3.1. 参照)

注3 博物館法第二章のこと。

注4 日本国籍をもたない日本在住の方々や、一時的に日本を訪れたり滞在したりしているの方々へ、本章で触れたように、様々な館で「開かれた博物館へ」の取り組みがすすんでいる。これらの取り組みについては、また別の機会に丁寧に取り上げたい。

注5 ユニバーサル・ミュージアム研究会

2009年に国立民族学博物館の広瀬浩二郎氏や小山修三氏が中心となってスタートした研究会。ユニバーサル・ミュージアム（誰もが楽しめる博物館）の具体像を模索する多様な研究活動を展開している。科学研究費プロジェクト、および国立民族学博物館の共同研究プロジェクトとして運用されている。

注6 4しょく会（「視覚障害者文化を育てる会」）

目が見える・見えないにこだわらず、みんなで「視覚を使わない」おもしろさと豊かさを社会に発信することをめざしている。

目が見えない・見えにくい「視座」から見常者中心の社会のあり方を問い直し、従来型の価値観・人間観の改変を迫る。そんな思いを込めて、「視覚障害者文化」を掲げている（広瀬，2017：pp. 144－145）

注7 「障害」と「障がい」の表記について

本章では「障害」という表記で執筆をすすめたが、文献を引用した箇所では、元の文献の表記が「障がい」である場合は、その表記のままとした。「障害」の表記に関しては、内閣府から2010年に『「障害」の表記に関する検討結果について』という報告書が出ており、「東京青い芝の会」や「特定非営利活動法人DPI日本会議」といった障害者団体の、「障がい」表記に関する否定的な意見が紹介されている。「害」を平仮名にすることで、「社会がカベを作っている」、「カベに立ち向かう」という意味合いが出ない」ということや、「障害を個人の外部に存在する種々の社会的障壁によって構築されたものとしてとらえる社会モデルへの転換を（中略）示した推進会議としては採用すべきではない」ということが指摘されている。（https://www8.cao.go.jp/shougai/suishin/kaikaku/s_kaigi/k_26/pdf/s2.pdf 2020.3.1 参照）。パーソナルモビリティを開発するWHILL株式会社は、自社ホームページのコラム「障害、障、障がい その表記の違いはいつから？」において、「車椅子利用者に対して社会に存在する心理的バリア、物理的バリアを「障害」と認識し、今後、私たちがデザインとテクノロジーで解消していくべきものとして、あえて「害」の字を利用していきます。」と述べた上で、「現状で大切なのは、表記

そのものではなく、どのように表記するかが話題になることで、一人でも多くの方が障害と社会のあり方について考えるようになること」ではないでしょうか。」と提案している (https://whill.jp/column/16_shougai 2020.3.1 参照)。また、広瀬浩二郎氏は、著書『万人のための点字力入門：さわる文字からさわる文化へ』(2010)において、漢字から平仮名への文字の変換は、意味そのものの変換を伴わない、消極的なものであると指摘し(pp.205), 2016年度からは『『障害』概念の再検討』に取り組んでいる (<https://www.minpaku.ac.jp/research/activity/project/iurp/16jr186> 2020.3.1 参照)。これらのことをふまえ、本章においては、種々の社会的障壁を解消していくという視点から、「障がい」ではなく「障害」と表記した。

注 8 UD トーク

会話(音声)が文字化されるアプリ
<https://udtalk.jp/> (2020.3.1 参照)

注 9 MULPA マルパ Museum UnLearning Program for All みんなで“まなびほぐす”美術館—社会を包む教育普及事業—

公益財団法人かながわ国際交流財団のよびかけで、神奈川県内の4つの美術館の館長・学芸員と芸術祭連携団体の実行委員等が集まり、2016年度に立ち上げられたプラットフォーム型のアートプロジェクト。MULPAとはMuseum UnLearning Program for Allの頭文字を取った略称で、日本語では「みんなで“まなびほぐす”美術館—社会を包む教育普及事業—」としている。
<http://www.kifjp.org/mulpa/about> (2020.2.29 参照)

引用文献

- American Association of Museums. 1992. Excellence and Equity: Education and the Public Dimension of Museums. 32pp. American Association of Museums, US.
- Besterman, Tristram. 2011. 26 Museum Ethics. “A Companion to Museum Studies” (Sharon Macdonald Ed.), pp. 431-441. Blackwell Publishing Ltd, UK.
- Falk J. H. & Dierking, L. D. 1995. Public Institutions for Personal Learning: Establishing a Research Agenda, 143pp. American Association of Museums, US.
- 博物館の手話ガイド育成支援プロジェクト. 2019. 聴覚障がい者が解説! 博物館の手話ガイド育成支援プロジェクト報告書. 27pp. 国立大学法人筑波技術大学, 茨城.
- 広瀬浩二郎. 2010. 万人のための点字力入門：さわる文字からさわる文化へ. 209pp. 生活書院, 東京.
- . 2014. 共活社会を創る. 「知のバリアフリー『障害』で学びを広げる」(嶺重 慎・広瀬浩二郎編), pp. 233 - 255. 京都大学出版会, 京都.
- . 2017. 目に見えない世界を歩く「全盲」のフィールドワーク. 264pp. 平凡社, 東京.
- ICOM. 2017. Code of Ethics for Museums. 50pp. International Council of Museums, France.
- 駒見和夫. 2014. 博物館教育の原理と活動—すべての人の学びのために—. 288pp. 学文社, 東京.
- . 2015. 第2章6 特別支援学校と連携した博物館教育の検討. 「人間の発達と博物館学の課題」(廣野光行・青木豊・並木美砂子編), pp. 128 - 142. 同成社, 東京.
- . 2016. 発達障害のある児童生徒の学習支援と博物館. 「特別支援教育と博物館」(駒見和夫

- 編), pp. 79 - 88. 同成社, 東京.
- . 2017. 博物館の理念的認識の推移について. 國學院雑誌, 118 (11) : 263 - 282.
- 黒澤 浩. 2016. 第9章 さわる展示の未来—南山大学人類学博物館の挑戦. 「ひとが優しい博物館 ユニバーサル・ミュージアムの新展開」(広瀬浩二郎編著), pp. 146 - 159. 青弓社, 東京.
- 大高 幸. 2020. 会話による美術鑑賞プログラムへの視座 英語によるプログラム「Let's Talk Art!」. 現代の眼, 634 : 10 - 11.
- 大村嘉人・堤 千絵・山本 薫・永田美保・植村仁美・小林弘美・二階堂太郎. 2013. 五感で楽しめるユニバーサル植物園を目指して. 日本植物園協会誌, 48 : 27 - 32.
- 島絵里子・岩崎誠司. 2020. 盲学校・視覚特別支援学校と連携した学習プログラムの開発・検討—「ミュージアム・タイムトラベラー太古の地球さがしー」の事例から—. 日本ミュージアム・マネジメント学会研究紀要, 24 : 29 - 37.
- ・——・小林由佳・濱野哲也. 2018. 東京都盲ろう者支援センターとの連携: 標本に「さわる・感じる・思いを馳せる」博物館での学習プログラム (特集 地域の身近な科学館・博物館). 金属, 88 (7) : 536 - 544.
- 堤 千絵・廣瀬彩奈・北村まさみ・永田美保・植村仁美・大村嘉人. 2015. 「手話で楽しむ植物園」と「手話通訳付き案内」の紹介—聾者と健聴者, 共に植物の理解を深めるために—. 日本植物園協会誌, 50 : 57 - 61.